（第2号様式）

神奈川県教育委員会教育長　殿

令和6年4月 25 日

県立綾瀬高等学校

令和5年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	4年間の目標 （令和2年度策定）	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （　3月 14 日実施）	総合評価（3月27日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①生徒の学力向上に資する、新しい学びとその評価方法を確立し、組織的な授業改善を一層進める。 ②生徒が学ぶ意欲を向上させ、課題解決力を身に付けることのできる教育課程を編成するとともに新学習指導要領の完全実施のための指導体制を確立する。	①ICT 機器を活用した授業づくりを研究し、評価方法を確立し、組織的な授業改善に努める。 ②授業のUD化を進めることで障害の有無に関わらず共に学ぶ意識を向上させ、課題解決力を身に付けることができる教育課程を編成する。	①動画やオンライン授業等、ICT 機器を活用した授業と評価の研究を引き続き行う。 ②本校生徒にとって必要な学校のUD化を検証し、必要な対応を検証するとともに組織的に課題の改善を図る。	①生徒による授業評価で「授業以外における学び」が定着したか。教室での講義型から脱却した授業の研究ができたか。 ②授業のUD化を図れたか。また、学校全体で UD化を推進することができたか。	①ほとんどの科目で動画やオンライン等、ICT機器を活用した授業を行うようになり、評価の研究を引き続き行っている。 ②本校生徒にとって必要な学校のUD化を組織的に取り組んでおり、授業プリント等校内での印刷物はUD化がかなり進んでいる。	①生徒による授業評価で「授業以外における学び」の定着については、引き続き行っていく。教室での講義型から脱却した授業の研究は多くの科目で実践しているが、さらに工夫が必要である。 ②授業のUD化については、板書などの手書きの部分の工夫が必要である。	①ICTを併用する学びが進み、生徒が理解しやすい授業が定着している。一層のICT利活用の深化に向け、研修等、学校全体の取組が必要ではないか。 ②組織的なUD化により、すべての生徒がわかりやすい環境づくりが進んでいる。	①このI年間で若手の教員を中心にICTを活用した授業は定着しつつある。しかし、約半数の教員が導入に足踏みしている状態である。 ②組織的なUD化については、全ての教員が実践している。	①年間行事予定にオンライン授業週間を設け、全職員で実施する計画を立てている。 ②新着任者にも組織的なUD化について説明し継続的に行っていく。
2	生徒指導 ・支援	①変化する社会と生徒への理解を深め、いのちを大切にする相談支援体制を確立し、すべての生徒に対し最適な支援を行う。 ②部活動、生徒会行事や委員会活動等の新しい支援体制づくりを推し進め、活動の活性化を実現し、生徒の主体性の育成を図る。	①生徒支援の意識を高めながら、支援を要する生徒の情報共有やケース会議、場合に応じた外部機関との連携を通して、生徒の健全な成長を支援する。 ②全ての生徒が関わることができる行事の在り方（行事の UD 化）を探るとともに、生徒が主体となって学校行事を運営できる能力を培う。	①各学年と Co との間での定期的な生徒情報の共有を行う。特に支援を要する生徒に関しては、ケース会議や SC・SSW との連携を図りながら、手立てを講じつつ、教職員全体で、充実した学校生活をサポートする。 ②全ての生徒が積極的に参加できる行事を検討するとともに、部活動の活動実績を、校内外の掲示物・HP・Twitter を活用してこまめに紹介することで生徒の主体性の醸成を図る。	①支援を要する生徒に関して、ケース会議や SC・SSW との連携を図りながら、手立てを講じることができたか。教職員全体で、充実した学校生活をサポートすることができたか。 ②個々の生徒の特性を把握し、行事の運営に反映できているか。また、委員会・係の活動状況が可視化でき、HP・Twitter が更新され、掲示物が常に新しいものに変わっているか。	①各学年と Co との間での生徒情報の共有や面談、「子どもサポートドック」を通じて、支援を要する生徒を把握した。SC・SSW と連携しながら外部機関へとつなげた。後期より「学校生活のきまり」を施行した。巡回を適宜行い、生徒の日常生活を支援した。 ②文化祭においては実行委員会等の生徒が積極的に参加し、素晴らしい成果をあげた。HP・X（旧Twitter）の更新も円滑に行われている。	①SC・SSW への相談件数が増えている。人間関係の構築に困難を抱えている場合が多い。改善への手立て、保護者との連携や情報提供等々、臨機の対応が必要となる。「学校生活のきまり」の施行によって生じる諸課題を把握し、改善していく。 ②今後も行事を生徒主体で実施するよう改善する。また、担当職員の役割分担の明確化とともに職員全体で協力しあう雰囲気づくりを醸成する。	①子どもが抱える課題が複雑化している。外部機関との連携を進めるとともに、生徒の日常の状況を教職員で情報共有し、初期対応できる体制の整備も併せて追及して欲しい。 ②部活動や行事を通じてコミュニケーション能力育成を図ることは大切である。一方で教職員の働き方改革も進めるべきである。	①教職員（含 Co）と SC・SSWとの連携の下、生徒支援の手立てを検討、実践することができた。反面、生徒が抱える課題は複雑化しており、それらへの適切な初期対応のあり方、環境の整備が課題である。 ②生徒主体の行事づくりについて一定の成果はあったものの、限られた期間でより達成感が得られるよう、さらに工夫する必要がある。	①教職員、特に学年団との連携を強め、支援の方針を共有しつつ、多様な視点からのアプローチにより、生徒の抱える課題の早期の顕在化と対応を図る。 ②マニュアルの計画的な作成と、職員組織の編成を早める等、支援しやすい環境づくりを整備する。
3	進路指導 ・支援	①進路データの蓄積と分析により、エビデンスに基づく「キャリア教育実践プログラム」を実践し、生徒の目標レベルを高め、その進路希望の実現を支援する。 ②「正解」のない課題を発見し、その解決に挑み、自らの学びと生き方をデザインしようとする態度や多様性を認めあい、人と協働して積極的に社会に貢献しようとする姿勢を育成する。	①エビデンスに基づく「キャリア教育実践プログラム」を実践推進し、生徒自身で目標設定を行い、主体的に目標を達成できるための支援を行っていく。 ②「正解」のない課題を発見できるような取り組みを行っていくとともに、周りの人と助け合い協力しあい積極的に社会に貢献しようとする姿勢を育成する。	①民間 Web 学習教材の有効活用や本校生徒の実態を反映した進路マニュアルを作成することで進路選択を見据えた指導及び進路データ分析等により個に応じた的確な支援を行う。 ②資格試験取得やインターンシップ等の体験を通じて、自己理解を深める等、上級学校卒業後の進路を見据え「正解」のない課題を発見する仕掛けを工夫する。	①民間 Web 学習教材の有効活用や模擬試験等の受験者数及び進路マニュアルが有効活用できたか。 ②生徒が自ら設定した課題の探究を進めていくことができたか。探究活動等の発表やアンケート等で、自己評価及び他者評価で高評価を得ることができたか。資格試験の受験者数及び資格取得者が増加したか。インターンシップの参加生徒が増加したか。	①今年度より導入した民間 Web 学習教材の活用は良好である。しかし、教科の特性もあり教科間で活用にばらつきがある。今後の活用について情報を密にとり、本校に適した運用の検討を進めていく。 ②資格試験、模試については定期的に実施することができたが、模試に関しては参加人数が少なかった。夏休み期間中のインターンシップや看護体験等の参加者は達成感があるとのことであった。更に参加人数を増やせるよう、生徒への周知方法の課題を残した。	①今年度導入したばかりで活用しきれていない部分もあるが、どのような活用方法があるか情報を集め検討を進めていく。 ②模試等に関しては、周知方法の検討を進め、参加人数を増やせるよう時間等、余裕をもって提示できるようにする。 インターンシップに関しては、外部機関を活用し、本校生徒の希望する分野・職種を充実させていく。	①自学自習の視点で、民間 Web 学習教材の活用は有効である。 ②外部との連携による総合的探究の時間の取組は素晴らしい。「正解」のない学びの奥行を更に深めてほしい。インターンシップ等についてもさらに充実した取組となるよう、環境整備を進めてほしい。	①外部民間 Web 学習教材導入により、授業等で取り扱いの難しい部分に関しても生徒の習熟度に応じて提供することができた。また、マニュアルも整理していくことができた。しかし、活用方法に関しては課題を残した。 ②模試等に関しては、計画的に実施できた。探究活動を通じて自己理解を深めることができた。	①本年度の活用状況を精査し、本校の実情に応じた活用方法を進め、提案していく。 ②classroom 等、周知方法を工夫していく。また、検定試験を利用した進路実現方法もあることも周知していく。

	視点	4年間の目標 （令和2年度策定）	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （ 3月 14 日実施）	総合評価（3月27日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
4	地域等 との協働	①地域の変化を踏まえた連携を深め、地域の教育力を活用する。また、生徒が学んだ成果を効果的に発信し、地域に還元する。 ②開かれた学校づくりを行いチーム学校の具現化を図る。	①小学校との交流や老人ホーム等の福祉施設等との交流を推進することで地域の人々とともに歩む学校づくりの推進を図る。 ②学校運営協議会を有効活用し、コロナ渦前の活動を振り返り、地域に開かれた学校の具現化を図る。	①地域との交流を推進し、地域の人々とともに主体的に探究する精神を育む学習活動を行う。また、学校見学をより機動的なものとするための仕組みを工夫する。 ②コロナ渦前に行われていた活動をもとに学校運営協議会での意見を参考に学校の諸活動の改善を図る。	①地域との交流により、生徒の探究する学びについて PDCA サイクルの手法を用いて推進できたか。生徒が学んだ成果を効果的に発信することができたか。 ②学校運営協議会委員との意見交換が活発に行われ、地域に開かれた学校づくりができたか。	①地域貢献活動を通して、地域に対する愛着心と地道な作業の重要さに気付かせることができた。 ②コロナ禍が一段落して、中学生の学校見学や学校説明会等が正常化してきた。また、新しい試みとして、部活動体験デーを実施したところ、大変好評であった。更に、寺尾小学校との放課後交流を推進し、その成果を地域フォーラムで発表することができた。	①今後は近隣の福祉施設等で交流する方法を探りたい。 ②地域や学校内の人的資源を活用し、生徒が活躍し、力を発揮できる場を設定するよう改善する。	①地域のボランティア活動の周知によって、生徒の積極的な参加を募ってみることも必要と思う。 ②今年度開催の「あやせスマイルウェーブ」の取組は大成功であった。次年度も、同様の活動ができるとよい。	①生徒の地域貢献活動の意義や必要性については定着してきている。 ②学校運営協議会の議論から本校の活動について改めて振り返ることができた。さらに地域の中で生徒が活躍し力を発揮できる場を設定できるとよい。	①ボランティア活動など、新たな取組のあり方を模索する必要がある。 ②今年度の取組を継続しつつ生徒の新たな活躍の場を探る必要がある。
5	学校管理 学校運営	①相互理解を深める教育活動、インクルーシブ教育推進に向けた環境づくりを図り、共生社会の実現を図る。 ②「いのち」を大切にし、事故、災害や疾病に対し自ら対応する力を育む。 ③教職員のキャリアステージに応じた資質・能力を高めるとともに、職員の働き方改革を一層促進し、効率的・組織的に学校運営を進め、生徒と向き合う時間を確保し、安心し信頼される学校の管理体制を構築し、維持する。	①学習環境の UD 化を積極的に取り入れる等、インクルーシブ教育推進に向けた環境づくりを促進し、校内外において共生社会の実現を図る。 ②学校が安全で安心な学びの場となるよう教育環境を整備し、生徒自ら対応する力を育む。 ③すべての職員が働き方改革を推進し、組織的で機動的な学校管理体制を図る。	①学習環境の UD 化を進めるとともに、キャリア支援センターやリソースルームを有効に活用し、生徒が相談しやすい環境作りを進める。 ②避難場所や防災物品を確認し、災害対策について検討する。また、教室等の安全点検を実施し、整備計画を立てる。 ③教職員の資質・能力を高めるために、ICT 機器の効率的な利用を推進する。また、業務を精選することで組織的で機動的な学校管理体制を図る。	①学習のUD化の実現状況及び生徒の満足度が上昇したか。キャリア支援センター及びリソースルームにおける生徒相談の件数が適切であったか。 ②綾瀬市防災担当者との打ち合わせを実施できたか。予算を含めた次年度計画を立て、簡易な整備は実施できたか。 ③教職員が生徒と向き合う時間を確保しつつ、時間外勤務の時間が減少したか。	①年度当初に教室のUD化について、職員間で意識共有を図り、学習環境のUD化を推進した。また、今年度からリソースルームを常時開放したことにより、クールダウンの必要な生徒の居場所づくりにつながった。 ②防災訓練やAED講習会を計画的に開催するとともに教室ロッカーの整備や老朽化したエアコン、下駄箱の更新計画を進めることができた。 ③職員の労務管理について、可能な範囲でPCを活用した管理とする等、学校管理体制の効率化を進めることができた。	①校内設備不良の関係もあり、リソースルームを必要以上にオープンにせざるを得ず、使用法について規律を保てない部分が出てきた。後期は、明確な規律作りを促進していく。 ②綾瀬市と連携し、想定外の事柄にも対応できる防災訓練の実施を計画的に進めていく。 ③生徒に向き合える時間を確保しつつ、働き方改革の着実な進展に向けた学校管理体制を整備する。	①必要とする生徒が必要な時に利用できるリソースルームの環境づくりは大切である。 ②自治会の防災訓練が日曜日開催のため、教職員の勤務の関係で難しい面もあるが、学校と地域が合同で実施できる取組を模索したい。 ③次世代の教職員を確保する視点に立ち、教職員の勤務時間の削減等、労働環境の整備を進めるべきである。	①リソースルームの利用について、該当学年と連携を取りながら、規律づくりに努めてきた。年末に校内設備が改善されたため、リソースルームの本来の利用（生徒のクールダウンの場として）ができるようになった。 ②防災訓練、AED 講習会、校内安全点検等の実施を行うとともに、老朽化した設備の修繕、備品の更新等をすすめることができた。 ③職員のPCを活用した労務管理により、事務処理の時間を削減することができた。時間外勤務の減少に向けて、より一層工夫する必要がある。	①新しく赴任する教員に向けて、学習環境の UD 化についてさらに周知徹底していく必要がある。また、クールダウンの場としてリソースルームを利用することについて、生徒の心理的ハードルを下げる必要がある。 ②自治会との合同防災訓練の取組の検討を進める。 ③衛生委員会等、あらゆる組織を活用して、働き方改革を推進する必要がある。